

# 性格のエンハンスメントの倫理的問題点について

## Ethical issues in Character Enhancement

日本学術振興会特別研究員 佐藤 岳詩

The Japan Society for the Promotion of Science SATO Takeshi

### *Abstract:*

In this paper, I argue against a recent movement that advocates the enhancement of human character. It holds that character enhancement is a kind of rational self-manipulation, so there is no ethical wrongness in enhancing our character. It also says that many conventional arguments against enhancement (e.g. by US President's Council on Bioethics) rely on a conservative misunderstanding of the nature of enhancement technology.

However, in my view, advocates of enhancement fail to capture the elements of the arguments of opponents of enhancement from three perspectives: (1) richness of life, (2) authenticity, and (3) mastery.

First, advocates of enhancement hold that character enhancement does not decrease the richness of our life, but it can increase the possibility of living an enriched life. But their conception of the richness is shallow and very limited. The original concept of richness of our life that is intended by opponents of enhancement is deeper, wider and something that is impossible to put into words.

Second, advocates of enhancement hold that it is no use arguing whether a certain character is authentic, because character changes naturally and gradually. So the point is whether one can admit the character as one's own. But the concept of authenticity that is used in the context of character enhancement need not be a literal authenticity, but it is a kind of "thick" concept that includes description and evaluation, and is conventionally defined by community.

Third, advocates of enhancement hold that character enhancement is not an instance of the drive for mastery because it is only a rational self-manipulation, so it should be seen as a kind of conduct of self-decision. But character enhancement that includes changing the future self cannot be regarded as a self-decision.

### 1. 序論

エンハンスメント技術の拡大は容姿や筋肉などの身体的諸要素への人為的な介入を可能としてきたが、昨今その対象は、薬物やBMI (Brain Machine Interface) による認知能力の増強、記憶の操作な

ど、心的な領域にも及んできた。中でも本稿で取り上げたいのは感情、欲求や性格を巡るエンハンスメントの是非である。従来、この領域における議論は大きく分けて、豊かさ、真正さ、支配の三つの論点を巡って論じられてきた。歴史的に見るとこの議論は、まず新しいエンハンスメント技術の可能性が示

唆され、それに対してエンハンスメント否定派が技術の規制を主張し、次にエンハンスメント肯定派がその主張に応答するという形で行われてきた。しかし筆者が見るところ、特に性格の操作の是非を巡っては、エンハンスメント肯定派の反論は十分なものではない。そこで本稿では、上で挙げた三つの論点に関して、エンハンスメント肯定派の主張に再反論を試みる。

まず第2節では、性格の操作を巡るエンハンスメントの展開について確認する。続いて第3節では、エンハンスメントについてしばしば持ち出される三つの論点の検討を行い、エンハンスメント肯定派は性格のエンハンスメントの擁護に成功していないことを示す。

## 2. 心的領域のエンハンスメントの展開

他の様々な領域のエンハンスメントと同様に、心的領域におけるエンハンスメントにも様々な事例があり、動機があり、手段がある。実際、人間の性格への介入それ自体は古来様々な形で行われてきた。たとえば我々は教育の中で親切、正直など特定の性格を子供達に植え付けようとしてきた。着る服や髪型などの外見を明るく変えることで性格も明るく、という言葉説もよく見られるものである。とはいえ、こうした間接的な介入ではなく、より直接的な生化学的介入が盛んになったのは20世紀に入ってからである。その前半に行われていたのは精神外科の手法、ロボットミ手術などであった。これは脳への外科的な操作を通じて患者の心的領域に介入するものである。しかしこの手法は様々な副作用がともなうことからまもなく禁止されるに至る。ロボットミに代わって、特に20世紀後半のエンハンスメントという問題領域で、中心的な論題となったのは、P. クレイマーが *Listening to Prozac* (Kramer [1993]) で論じたプロザックを巡る議論である。

プロザックとはアメリカで発売されたフルオキシチンの商品名であり、SSRI（選択的セロトニン再取込み阻害剤）の一種である。元来はうつ病の治療薬として開発されたものだが、その効果と安全性をうたい文句に1990年代に爆発的な売れ行きを誇り、実際その認知度はSSRI全般を指す一般名詞としてプロザックという語が使われるほどに高いものであ

った。そしてクレイマーによれば、プロザックは単なる抗うつ剤としての効果だけでなく、服用者の性格を変化させる劇的な効果をも持つものであった。たとえば彼が挙げているテスの事例では、暗く内向的だった女性がプロザックの服用によって明るく外向的な性格へと変貌しており、その影響は当人のアイデンティティ・自己理解にまで及んでいる。

その後、リャオとローチの“After Prozac” (Riao & Roach [2011]) によれば、2000年代に入って、副作用の問題や特許消滅にともなう後発薬品の登場でプロザックの影響力は衰えてきた。代わってエンハンスメントの文脈において中心となってきたのは、SNRI（選択的ノルアドレナリン再取込み阻害剤）である。SNRIはエフェクサーという商品名などで知られ、SSRI同様抗うつ剤としての働きをもつが、SSRIよりも副作用が少ないとされるものである。そしてこれもプロザック同様、服用者の性格に作用し積極性や協調性などを増すことに利用しうるとされている。

あるいはホルモン的一种であるオキシトシンとバソプレシンにも近年では注目が集まっている。これらを投与された人は他者に対してより信頼や愛情を抱きやすくなるという。特にこの他者への信頼や愛情の増強の是非は人々の道徳心の向上、モラル・エンハンスメントの分野において盛んに論じられている<sup>1)</sup>。またBMIやマイクロチップによる行動の統御も近い将来に議論の俎上にあがってくることは間違いない。

さて、本稿は性格に対するこうした生化学的介入に共通の特徴について論じるものである。したがって特定の薬物や装置の効果や使用の是非を論じるわけではない。その上で、本稿で想定するのは「シャイで引っ込み思案な性格を明るく社交的にする」「猜疑的、暴力的な性格を柔和で温厚な性格にする」などの事例である。いずれの事例も薬物の使用者が重度のうつ病の場合などと違って、「回復よりも改善 (better than well)」を目指すエンハンスメントの事例と考えられるものである。また強制的で非人道的側面をもっていた旧優生学と類比的に語られるのを避けるため、基本的には自発的に自由に自らに施す介入を考える。これは現在のほとんどのエンハンスメント論が前提としている想定で、リベラル優生学

と言われる考え方である。特に多くのエンハンスメント肯定論者は、自己決定の論理に基づいて、自発的エンハンスメントに対する他者の批判をかわそうとすることが多い。このような考え方の有効性については3.3節で論じる。なお性格と言っても様々な解釈が可能であるが、ここでの「性格」は当人の思考、感情等の傾向性の束を指すものとする。

### 3. エンハンスメントを巡る三つの論点

従来の心的領域におけるエンハンスメントを巡る論点は三つに大別できるように思われる。それは第一には豊かさを巡る問題、第二には真正さを巡る問題、第三には支配を巡る問題である。第1節で述べたように従来の議論は、まずエンハンスメント否定派がこれらの問題を提起し、それについてエンハンスメント肯定派が反論するという形で進んできた。本節ではそれらのエンハンスメント肯定派の反論に順に再反論することで、どの論点についても、エンハンスメント肯定派の議論が完全には成功していないことを示してみたい。

#### 3.1 豊かさを巡る問題

心的領域におけるエンハンスメントについて、第一に考えられる批判は、それが我々の生がもつ深み、豊かさを減少させるというものである。たとえばL. カスを委員長としたアメリカ大統領生命倫理評議会は「現実の出来事と対応しない形で得られた感情、性格は、薄っぺらなもので真の人間の豊かさを脅かす」(Kass & Safire [2003: 317])として、薬物などによって得られた性格について否定的な見解を述べている。彼らの考えでは、いつでも常に明るく過ごすことなどは、人間の生の豊かさを損なう。むしろ苦しむべき時に苦しむことのできる自然で豊かな感受性こそが重要であると彼らは論じる。

しかしエンハンスメントを擁護する論者によれば、これはまったくの誤解である。たとえばG. ケイハンによれば、単に性格を一律に明るくすることだけがエンハンスメントではない。エンハンスメントはむしろ人を情緒的に豊かにすることを目的として行われうる。つまり、薬物によって人々は感受性を高め、情動的理由（しかじかの場面では悲しむ、喜ぶ、愛する理由がある、など）に、適切に応答でき

るような性格を得ることができるというのである(Kahane [2010])。あるいはサバレスクらは、どうしてもパートナーに対する愛情を抱けない夫婦がエンハンスメントを利用して互いに対する豊かな愛情を獲得することは、結果として彼らに暖かみのある生活を与えることになるかと論じている(Savulescu & Sandberg [2008])。

このエンハンスメント肯定論者の反論は、確かにそのような目的でエンハンスメントが行われたならば、その介入には正当化の余地がありうる、という意味では妥当なものである。

だが、そのような側面をもつ一方で、やはりこの反論はエンハンスメント否定論者の意をくみ尽くしたものとはいえない。それは、筆者が思うにエンハンスメント否定論において引き合いに出されている「豊かさ」や「深み」はそもそも理由を超えたものであると思われるためである。理由に従って反応できることばかりを重視することは、人間のあり方をその理性的な理由、あるいは意識できる想像力の範囲内に閉じ込めることになるのではないだろうか。たとえば「あらゆることを考えてみてもこの人を愛すべきなのに、私にはあの人しか愛せない」「親しい人を亡くして、私には悲しむべき理由があるのに、どうしてだろう、悲しみがわいてこない」など、理性が告げる理由の観点を超えた感情の動きにこそ、我々は人の生の深みや味わい、豊かさを見いだしてきたのではないだろうか。

つまり、我々が理由などとして理性的に意識することの限界を超えた外側、つまり語り得ないものの領域で身体や情動が勝手に動くことにこそ、我々は生の深み、豊かさを見いだしてきたのである。したがって、豊かさという点に関して言えば、心的領域のエンハンスメントは結果として生の豊かさを減少させるのであり、エンハンスメント肯定派の反論は十分なものではない。

ただし豊かさを巡る議論は、心的領域のエンハンスメントの一律の禁止ないしそれ自体の不正を意味するわけではない。なぜならこの豊かさの減少という結果を凌駕しうるだけの善い結果を、エンハンスメントはもたらしうる、とエンハンスメント肯定論者は主張しうるためである。たとえば仮に上で挙げた例の中の夫婦も、ギスギスした家庭生活の上で離

婚をして荒んだ生活を送るよりも、たとえそのことによって人間の生の深みなるものが減少するとしても、温かな家庭を維持することの方が重要であると言えることができるかもしれない。この反論はバランスアプローチと呼ばれるもので非常に重要であるが、その帰趨は3.3節で論じるものとし、以下では先に第二の論点、真正さを巡る問題を検討してみたい。

### 3.2 真正さを巡る問題

豊かさの問題と同じく、心的領域のエンハンスメントに関してしばしば持ち出される批判に、人工的手段によって得られた感情や性格は偽物であるというものがある。特にプロザックによる性格の操作に批判的な論者として知られる C. エリオットは、薬物で作られた性格やそのような性格に基づく感情は人為的なもの (factitious)、偽物 (inauthentic) であり、真正なものとはみなされないと主張しており (Elliot [2000])、同様の批判は先に挙げた大統領生命倫理評議会報告書にも見られる。

しかしこうした批判に対し、エンハンスメントを擁護する D. ドゥグラチアは真っ向から反論している。彼によれば、そもそも自己は時と共に自然に変わっていくものである。そして現実には人はある程度までそれを自らの手で変え、創り出している。したがって、問題は当事者が新しい自己を肯定できるかどうかであって、それを他人が偽物であるとか言うことには意味が無い (DeGrazia [2000])。そのため、新しい自己に当人が満足できるのであれば、そこに道徳的に非難すべきことは何もないように思われるということである。

さて、エンハンスメントによって得られた性格が文字通りの意味で偽物であるかどうかは、ドゥグラチアの言うように、一意に決定できるものではなく、またエンハンスメントがそれ自体として否定されるべきかどうかにとっておそらく決定的ではない。

しかしここで重要だと思われることは、我々は現実の営みとして、日常的にある感情や性格を真正なものに見えたり、偽物と見えたりし、かつ前者に高い価値を見いだしているという事実である。つまり、ここで我々は心的領域のエンハンスメントにおいて持ち出されている真正さとは単なる対象がもつ何らかの客観的性質の記述ではなく、我々の価値

観に依存するある種の態度を表明しているのと言うことができる。エリオットも最近の論考において「真正さとは文字通りの記述ではなく、一つの道徳的希求とみるべきである」としている (Elliott [2011])。

たとえばゴーギャン作と言われる二枚の絵があり、片方は実際にゴーギャンが描いた絵で、もう片方はまったく無名の画家がゴーギャンの作風に似せて描いた絵であるとしよう。この場合には客観的に見て、前者は真正なゴーギャンの絵であり、後者はゴーギャンの偽物であると言うことができる。しかし心的領域のエンハンスメントが問題とする感情や性格はこれと同じ意味で真正のものだったり偽物だったりするわけではない。むしろそれは「本物の印象派と言えはゴーギャンだよ」という発言で使われる「本物」という語に近いものである。

また F. クレーマーはエンハンスメントの文脈で問題となるような感情の真正さとは社会文化に依存する規範であると述べている (Kraemer [2010])。つまり、何がその人の真正な性格と見なされるかは我々の属する文化や共同体などによって決まるものである。しかもその際、真正さは肯定的な価値と、偽物是否定的な価値と文化的に見て強く結びつけられている。別の言い方をすれば、性格の真正さは P. フットや B. ウィリアムズの言う「濃い概念 (thick concept)」の一種であり、共同体が共有する価値観や感情と深く結びついた記述である<sup>2)</sup>。

ではその上で、たとえば、両親の私への優しさが薬に依存していると気づいた場合に、私はどう思うだろうか。彼らが、どれだけ薬を飲んでいるときの自分が本当の自分なのだと言っても、我々は自分たちが身につけている濃い概念としての価値観から見て、その優しさを本当のものだとは見なせないのではないだろうか。そしてこの偽物という概念は否定的な価値と強く結びついたものであるため、我々はこの両親が行っているエンハンスメントに否定的感情を抱くのではないだろうか<sup>3)</sup>。このエンハンスメントが惹起する否定的な感情は、少なくとも、エンハンスメントに反対する一つの根拠となりうるだろう。したがって、エンハンスメント肯定論者が言う、本人が本物だと見なしさえいれば、そのエンハンスメントは偽物ではなく、また否定的に応答す



べきものともならないという主張は成功していない。

とはいえ、エンハンスメント肯定論者はここでもまた3.1節で述べたものと同様の種類の反論を行うことができる。すなわち、エンハンスメントによって生み出された性格がたとえ否定的な感情を生み出すとしても、それを上回る圧倒的な量の肯定的感情を生み出すとすれば、やはりエンハンスメントは許容されるべきだということになるではないか、と。愛情の場合はそれが生み出す否定的感情が大きすぎる点で難しいとしても、暴力的な性格などに関して言えば、薬物によってでもそのような性格が抑えられることは周囲の人にとっても本人にとってもよい結果をもたらしうる、ということは説得的でありうる。

さて、このように考えるなら結局、豊かさも真正さもエンハンスメントそれ自体の是非を問う論点にはならないというのは事実である。使い方によって、エンハンスメントは結果としての豊かさを増すことにも減らすことにもなる。あるいは真正さを文化依存的な濃い概念の一種と考えるとしても、結局エンハンスメントの是非を決めるのはそれがもたらしうるその他の肯定的価値とのバランスということになる。エンハンスメント肯定論者の A. ブキャナンはこのような考え方をエンハンスメントにおけるバランスアプローチと呼び、サンデルの議論を始めとするエンハンスメント否定論を強く批判している (Buchanan [2011])。それによれば、エンハンスメントと悪徳とのつながりは偶然的なものに過ぎず、しかもそのつながりはコントロール可能なものである。たとえばエンハンスメントを用いたからといって、必ず努力を怠る人間になるわけではなく、必ず過剰に他者を支配しようとする人間になるわけでもない。そのため我々に必要なことはエンハンスメントを一律に禁止する理由を論じることではなく、第一に適切な介入と不適切な介入を区別すること、第二に悪徳を育ててしまうことにつながるリスクを低減することである。そしてこのバランスアプローチに即して考えるならば、サバレスクが挙げているような性格のエンハンスメントを禁止すべき理由はない、と彼は述べる。

しかしながら、筆者の考えるところでは、その他の身体的なエンハンスメントと違って、感情や性格

についてのエンハンスメントに関しては、ブキャナンが言うようなバランスアプローチをとることは困難である。3.3節では支配を巡る論点と絡めて、この点を明らかにしたい。

### 3.3 支配を巡る議論

性格のエンハンスメントの是非を巡る第三の、そしてもっとも重要な論点は、自律と支配を巡る問題である。それはこれまでの論点、たとえば豊かさの問題はエンハンスメントが結果としてもたらすものに、そして真正さの問題は手段としてのエンハンスメントの是非を主な問題としていたのに対し、この自律と支配を巡る論点はエンハンスメントそのものの動機を問題としているためである。

エンハンスメント否定論者の中でも M. サンデルらは、エンハンスメント技術が含意する過度の支配欲を問題にする。彼によれば、エンハンスメント技術は自由という言葉をたてに、あらゆるものを支配の対象にしようとするが、それは我々の生の被贈与性 (giftedness) を否定し、謙虚さ (humility) を失わせる (Sandel [2007])。そしてこの謙虚さの喪失は、不完全なもの・招かれざるものへの寛大さを失わせ、自分たちの意志だけを重視する立場へと人を墮落させるものである。

こうした被贈与性や謙虚さの重視は多くの日本の論者にも見られる傾向である。たとえば島藺は「エンハンスメントの倫理的問題のかかなりの部分は、自律性主体性の弱体化にではなく、自律性主体性の過剰な追求に見るべきである」とした上で<sup>4)</sup>、「世界と他者から与えられたものによってこそ生きていることを知り、そしてそれを喜びをもって受け入れることにこそ生命の価値の主要な源泉が感じ取られる」(島藺 [2009: 136]) としている。あるいは松田は「身体の傷つきやすさ、壊れやすさ」こそ他者との連帯からなる人間社会を根底から支えるものとし、「増進的操作への熱中は生 (Life) を貧弱なものにし、連帯社会を危うくするリスクを孕んでいる」と論じている (松田 [2008: 193])。

彼らは、世界から与えられた自他の不完全で傷つきやすい身体を謙虚に受け入れる姿勢に倫理的に善い生き方を見いだす。そして自由と欲求の範囲を拡大することですべてをコントロールしていこうとす

る思想を批判する。このようなエンハンスメントの見方を以下ではエンハンスメントの支配モデルと呼ぼう。

支配モデルに対してエンハンスメント肯定論者らが提出するのはエンハンスメントの「合理的自己操作モデル (rational self-manipulation model)」である。この立場をとる A. ブキャナンによれば、エンハンスメントとしての（特に道徳的な）性格の改変は「合理的自己操作」であって、自分で自分を操作しているに過ぎず、あらゆるものの無制限の支配を目論むものではない (Buchanan [2011])。ブキャナンの考えでは、性格の適切なエンハンスメントとは、それ自体としては不完全で悪徳に満ちた自己を合理性の観点から自ら拘束し、利益と不利益のバランスをとって、より有徳な性格、より多くの利益を生むような性格へと改変することである。

さて、この合理的自己操作モデルは、二つの要素から成り立っている。第一には、自分で自分に操作を加えているのだから、そこに他人が責めるべきことはないという自己決定の論理がある。性格のエンハンスメントは自己決定権の正当な行使であり、その意味で、支配モデルによるエンハンスメント理解は誤っていると彼らは考える。あるいはこのことは、エンハンスメントがいわゆる優生学的であるとの批判を回避するために重要である。実際、たとえ多くの利益が得られるとしても、強制的な介入は許容されないとブキャナン自身も考えている (*ibid.*: 21-23)。

合理的自己操作モデルに含まれる第二の要素は、比較考量の結果としてより多くの善を生み出すような性格になるべきであるというバランスアプローチである。それによれば、性格のエンハンスメントが許容されるかどうかは、見込まれる利益に対して、不利益が受け入れ可能なものであるかどうかである。生化学的エンハンスメントが肯定されるには、それが被贈与性の感覚に背くことで失われる善を補償するだけの善をもたらすことが示されればよく、実際それは損失を補ってあまりある善をもたらすのだ、とブキャナンは述べる (*ibid.* p.78)。彼は我々の性格を不完全でさらには悪徳につながるものと見ており、エンハンスメントによって有徳なものへと改善した方がよいと考えている。そのため「自己を対象

とみなすこと、あるいは自己の操作それ自体には悪いところは何もなく、それどころか、そうすることが道徳的義務であることすらある」(*ibid.*: 91) のである。

ブキャナンの考え方では、支配モデルで見るとならばエンハンスメントは認められる程度を超えた自律性の過剰であるが、より妥当なモデル、つまり合理的自己操作モデルで見るとならばエンハンスメントは合理性の範囲内の自律的な行為である。このモデルに基づくことで、我々は道徳的に妥当なエンハンスメントを導き出すことができる、とブキャナンは考える。たとえば豊かさ・真正さなどの点で負の価値が生じるとしても、より多くの正の価値をもたらすような介入を、自分で選び自分に施すことは適切なエンハンスメントである。

しかしながら、筆者の見るところでは、バランスアプローチは、単に自己に対する操作と見なせない要素を含んでおり、その点で自律的行為というよりもむしろ本質的に他者に対する介入と見なされるべきものである。したがって、ブキャナンが考えるようには自己決定の論理とバランスアプローチは両立せず、その点で合理的自己操作モデルには内的不整合がある。以下ではその理由を論じてみたい。

## 合理性の観点と自己の観点

さて、ブキャナンが言う合理性の観点から自らを拘束するとは具体的にはいったいどのようなことなのだろうか。ブキャナンは合理的自己操作モデルを、オデュッセウスを例に挙げて、不完全な合理性に基づく自己の身体を対象化し、そこから引き離され距離をとった理性的自己によってそれを拘束する自己拘束という形で語っている (*ibid.*: 91-92)。オデュッセウスの身体はセイレーンの歌を聴けば水に飛び込んで死んでしまうのだが、同時にそれを聴きたいと思ってしまう点で、合理性が不完全である。そこで彼は死なずにセイレーンの歌を聴くことがもっとも理想的に合理的であると考えた上で、そこから自己の身体を理性的に操作する、つまり具体的には自分の体をマストに縄できつく縛り付けるのである。これはシンプルに言うと、「理想的に合理的な自己」が合理的でない自己を操作するモデルと理解できる。性格の問題に戻して言うならば「私が理想

的に合理的であったならば、私は自分が内向的であるべきでないと判断するだろう」ということから、生化学的操作等を通じて自分の性格を外向的なものへと作りかえるということである<sup>5)</sup>。

このモデルはわかりやすいものであるが、バランスをとって性格の善し悪しを決める最終的な権威はどこにあるのかという問いを考えると、ある困難が生じる。まずこのバランスの権威の問いについては二つの答え方が想定できる。第一は「理想的に合理的な」の部分、つまり合理性そのものに性格の善し悪しの規準が含まれていると考えることであり、第二は「自己」の部分、合理性の力を借りつつ、規準を決めるのは最終的には自己であると考えられることである。そしてこのどちらをとっても、心的領域のエンハンスメントは自己決定の論理を放棄するよう迫られ、ブキャナンの立場はうまくいかないのである。以下ではこのことを明らかにしよう。

#### (1) 合理性に性格の善し悪しを決める権威を見いだす場合

第一の考え方をとるならば、性格の善し悪しを利益と不利益のバランスに基づいて決めるには合理性のみで足りるということになる。しかしこれはサandelがエンハンスメント論よりも以前に「負荷なき自我」という語をもって批判したものである（Sandel [1998]）。すなわち自分の属するコミュニティを起点としたアイデンティティ理解、性格や人々が実際に持っている愛着、コミットメントなどを抜きにした負荷なき理性的主体は単独では、何が利益で何が不利益であるかを定めることができず、独自に自由で重要な決定をすることはできない。特にブキャナンのバランスアプローチは多分に功利主義的であるが、功利主義は基本的に経験主義に基づいており、我々が実際に何に効用を見いだすか、ということと切り離して論じることはできない。

そこでとられる方策が、合理性のうちに何らかの客観的な価値基準を認めることである。しかしそうすると、今度はブキャナンがよってたつ自己決定の論理が成り立たなくなる。つまり、利益と不利益のバランスをとってあるべき性格の決定権を握るのは自分ではなく、その客観的価値としての合理性となり、その基準に従っていない者は合理的である誰に

とっても非難の対象となるためである。そして人々の合理性には程度の差があるため、あるべき性格は「より合理的」であるとされる人々によって決定されることになる。したがって自己決定の論理は保持されえず、合理性のうちに性格の善し悪しの規準を求める考え方は、ブキャナンの考える合理的自己操作論を支持するものにはならない。

#### (2) 自己に性格の善し悪しの規準を見いだす場合

次に第二の考え方、すなわち、利益と不利益のバランスをとって性格の善し悪しを決めるのは合理性の助けを借りつつも、最終的には「自己」とであるという考え方をとったとしよう。これは道徳的価値についての構成主義者らに見られる考え方で、自分のあり方や持つべき性格を決めるのは、当人がもっている、生き方に対する選好、道徳的コミットメントであるとするものである。

しかし性格のエンハンスメントに問題を限って言うならば、この立場は自己決定としての合理的自己操作モデルを支持しない。なぜなら、ブキャナンも認めることであるが、自己操作モデルは、「操作される自己」の背後に、「操作する自己」が常に安定した核として存在することを要請する。しかし、性格の操作は「操作する自己」の側にも作用する。それはある人の「自己」は普通、価値観や性格、主観的な動機のセットなどから成り立っているためである。性格の操作は、特にそれがラディカルなものであればあるほど、選好やコミットメント自体を根本的に変化させる。そうすると新たな性格が得られた時点で、同時に、その性格について価値判断を行う自己が失われ、自己自体が別の自己へと変わってしまう。

これはD. パーフィットの言い方を借りれば、エンハンスメント前の自己とエンハンスメント後の自己が心理的連結性（psychological connectedness）を欠くためである。彼によれば「私が提案した語り方によれば、われわれは「私」その他の代名詞を、われわれの生の中で、発言時のわれわれと最も強い心理的連結を持っている部分だけを指示するように用いることになる。その連結が著しく減少されると——性格や暮らし方や信念と理想に重要な変化があると——われわれは「それをしたのは私ではない。



以前の自我である」と言うかもしれない」(Parfit [1984: 304-305])<sup>6)</sup>。

性格のエンハンスメントは心理的連結性を著しく減少させる<sup>7)</sup>。そうすると以前の自己と未来の自己の間には断絶が生まれ、両者は同じ「私」という語で指し示されるものではなくなる。その場合、以前の自己が未来の自己を操作することは自己決定とは言えないのである。自己決定とは普通、自己に属する性質について自律的に決定を下すことと思われるが、エンハンスメントによって得られるのは別の自己であって、自己に属する別の性質ではないためである。つまり、自己決定として語りうるのは、エンハンスメントによって自己が消滅するその時点までであって、その後の時点で得られる別の自己のあり方を今の時点で決定するのは、もはや自己決定ではない。

むしろそれはハーバーマスが、胚に対する遺伝子操作、デザイナーズベビーの問題で批判したように、人間の対象化であり、対象を望ましい状態にしようとする積極的優生学と何ら変わりのないものである (Habermas [2001])。彼が着目したのは、介入がもたらす不可逆的な人格間の非対等性であった。胚に対する遺伝子操作は子を親の道具とし、決して脱出することのできない従属関係に置く。性格のエンハンスメントにも同様の構造がある。つまり、性格のエンハンスメントは現在の私による未来の別の私の支配を本性とする非対等な介入であり、その点で、合理的自己決定というよりも他者への介入なのである<sup>8)</sup>。パーフィットによれば「他人に対して行うと不正であることを、われわれの未来の自我に対して行うべきではない」(Parfit [1984: 320])。したがって、(1)と(2)のいずれの理解をとるとしても、自己決定の主張とバランスアプローチは両立しない<sup>9)</sup>。

それでもエンハンスメント肯定論者にはまだ、性格のエンハンスメントが他者への介入であることを認めた上でなお、そもそも他者の支配、他者への介入という要素がそれ自体として、エンハンスメントの不正さを示しているわけではないと開き直す道が残されていると思われるかもしれない。たとえば彼らはしばしば、我々は子供に対する教育において、現実に性格についてのパターンリスティックな介入

を行っているのではないかと述べる。そして問題はその介入が適切な介入でありうるかどうかであると。ブキャナンはこの種の介入は子どもに対する支配欲という不適切な感情に基づくものではないと主張する。しかしこの教育とのアナロジーによる反論はきわめて重要なことを一つ見逃している。それは少なくとも理想的には、我々は教育を通じて子ども達が主体的に「変わる」ことを期待しているのであって、子ども達を強制的に「変える」ことを目指しているわけではないということである。そして我々の意に沿わない性格をもった子について、もし我々が薬物を投与したり、BMIを埋め込んだりして直接に彼らの性格を作り替えようとするなら、やはり我々はそれを不当な支配と呼ぶのではないだろうか<sup>10)</sup>。そこから翻って考えると、結局、性格のエンハンスメントも未来の私を直接に作りかえ、支配しようという本性をもつと言える。そしてこの支配という概念は自律の尊重と相反する不正なものであるように思われるのである。

#### 4. 結論

以上、本稿ではエンハンスメント否定論への反論に再反論することを通じて、性格のエンハンスメントに含まれる負の側面を指摘してきた。すなわち、性格のエンハンスメントは我々の生の深み・豊かさを減少させ、真正なものを求める感情を傷つけ、本来の自己決定の範囲を超えた支配・従属関係をもたらす。

しかしそれでもなお、ブキャナンらは、それらの負の側面をエンハンスメントがもたらす利益は上回りうる、したがって利益と損失のバランスを考えたならば、適切なエンハンスメントはありうると主張するかもしれない。確かにそのようなケースを想定することは不可能ではない。現に行われている重度のうつ病の治療などは妥当な介入であるだろうし、3.2節でも挙げたように暴力的な性格から温厚な性格となることは、そうした事例の一つになりうるかもしれない。

しかしながら、これらの事例は悪い状態からよい状態への移行であり、そうした事例でもたらされる善が損失を凌駕しうるということは我々にも認めうる。酒を飲んで暴れるアルコール中毒患者に酒を控



える理由があるように、あまりにも暴力的な性格には自分や他者に対して危害をもたらす危険性がある以上、それを変える理由があるだろう。だがそれに対し、第2節で述べたように、エンハンスメントの本質は「回復よりも改善 (Better Than Well)」を目指すことにあり、よい状態からよりよい状態を目指すことにある。本稿ではエンハンスメントのもたらす善については重点を置いて考察することができなかったが、性格についてのラディカルなエンハンスメントが我々にもたらす損失は、エンハンスメントの肯定派が考えているほどに小さいものではない。したがって、今ある自己の価値観でこれからの自己のあるべき姿を決めてしまい、その枠に自己を閉じ込めてしまうのではなく、むしろ日々の生活や熟慮の中で自然に変わっていく自己を主体的に生きていくことこそ、我々にとって本当に必要なよりよい生き方であると思われる。

#### 〈注〉

- 1) Douglas [2011] など
- 2) 濃い概念とは、戦場において敵に向かっていく兵士に向けて言われる「勇敢である」などのように、記述と評価が絡まり合った概念であり、特定の共同体などで特定の文脈において使用されるものである。これに対し、様々な人々によって様々な状況に適用される「正しい」などは「薄い概念」と言われる。cf. Williams [1985]
- 3) もちろん、その場合にも、我々が身につけている価値観がそれ自体としてそもそも適切なものではないのではないかと問うことはできる。しかし筆者の考えるところ、価値観の適切さ自体さえ、我々の身につけている価値観から完全に離れて考慮できるものではない。その意味で、今我々が現に有している価値観、感情を完全に無視することは妥当ではないように思われる。
- 4) この点は、エンハンスメント技術に頼ることで行為者性は減少すると主張するサンドルと対立している。
- 5) 本稿では詳しく論じないが、この部分に「条件的誤謬」を見いだすこともできる。条件的誤謬とは、被分析項が分析項である条件法の前件と独立でない場合に起こりうる誤謬である。この誤謬を回避する方法の一つが、条件法内の私と被分析項内の私を分離することである点は、本稿の議論にとって示唆的である。cf. 杉本 [2011]
- 6) パーフィットは心理的連結性の他に心理的継続性も人格の

同一性にとって重要であるとしている。しかしこの継続性をもたらす自己は単なる視点としての自己と解されるものであり、単なる視点の継続性としての自己は厚みをもたない。したがってこの節で論じているような価値判断をくだす主体とはなることができない。

- 7) もちろん現状の薬物を用いたエンハンスメントは、服用者の性格をいきなり完全に変えてしまうものではない。その意味で、心理的連結性の減少には程度があり、あるレベルの介入までは同一性に影響しない。あるいは現状の薬物は時間の経過によって効果がきれるものであるため、完全な意味で不可逆的な介入というわけでもない。しかしエンハンスメントの肯定派が目指すエンハンスメントは基本的に恒久的・不可逆的な変化をもたらす介入であり、本稿でもそのようなエンハンスメントを想定している。
- 8) そもそもベントムの古典的功利主義が社会全体の善を目指し個人に介入するパターナリスティックな側面を持っていたことも忘れてはならない。また R. クリプなどの現代の功利主義者らも人格の同一性に重要性を認めない (Crisp [2006])。
- 9) これは身体的能力のエンハンスメントなどには当てはまらない、心的領域のエンハンスメントに特有の問題である。筋力の増強などのエンハンスメントは操作する背後の自己を揺るがさない。しかし性格などを根本的に変える心的領域のエンハンスメントは、そうではない。その意味では、身体的能力のエンハンスメントに関してはバランスアプローチは適切な理論でありうる。
- 10) 立花 [2009] も参考にされたい。

#### 〈参考文献〉

- Buchanan A. 2011: *Beyond Humanity*, Oxford University Press
- Crisp R. 2006: *Reasons & the Good*, Oxford University Press
- DeGrazia D. 2000: "Prozac, Enhancement, and Self-creation", *Hastings Center Report* vol.30(2) pp.34-40
- Douglas T. 2008: "Moral Enhancement", in Savulescu J. Meulen R. Kahane G. (eds.) *Enhancing Human Capacities* Wiley-Blackwell 2011
- Elliot C. 2000: "Pursued Happiness and Beaten Senseless: Prozac and the American Dream", *Hastings Center Report* vol.30(2) pp.7-12
- Elliott C. 2011: "Enhancement Technology and the Modern Self", *The Journal of Medicine and Philosophy* vol.36(4) pp.364-374
- Hare R.M. 1981: *Moral Thinking*, Oxford University Press
- Kahane G. 2011: "Reason to Feel, Reason to Take Pills", in Sa-

- vulescu J. Meulen R. Kahane G. (eds.) *Enhancing Human Capacities* Wiley-Blackwell 2011 pp.166-178
- Kass L. & Safire W. 2003: *Beyond the Therapy: Biotechnology and the Pursuit of Happiness A report by the President's Council on Bioethics*, Regun Books
- 倉持武監訳 『治療を超えて バイオテクノロジーと幸福の追求 大統領生命倫理評議会報告書』 青木書店 2005
- Kraemer F. 2010: “Authenticity Anyone? The Enhancement of Emotions via Neuro-Psychopharmacology”, *Neuroethics* 4(1) 2011 pp.51-64.
- Kramer P., 1993: *Listening to Prozac*, NewYork  
[堀たほ子訳・渋谷直樹監修『驚異の脳内薬品 鬱に勝つ「超」特効薬』 同朋舎 1997
- Liao S. & Roach R. 2011: “After Prozac”, in Savulescu J. Meulen R. Kahane G. (eds.) *Enhancing Human Capacities*, Wiley-Blackwell 2011 pp.245-256
- Parfit D. 1984: *Reasons and Persons*, Oxford Clarendon Press
- 森村進訳 『理由と人格 ——非人格性の倫理へ』 勁草書房 1998
- Sandel M. 2007: *The Case Against Perfection: Ethics in the Age of Genetic Engineering*, Harvard University Press
- 林芳紀・伊吹友秀訳 『完全な人間を目指さなくてよい理由 遺伝子操作とエンハンスメントの倫理』 ナカニシヤ出版 2010
- Savulescu J. & Sandberg A. 2008: “Neuroenhancement of Love and Marriage: The Chemicals Between Us”, *Neuroethics* 1(1) pp.33-44
- Williams 1981: “Persons, Characters, and Morality”, in his *Moral Luck* 1981 Cambridge University Press, pp. 1-19.
- 1985 *Ethics and the Limits of Philosophy*, Harvard University Press
- (邦訳 『生き方について哲学は何が言えるか』 森際康友・下川潔訳 産業図書1993)
- 島蘭進 2009: 「精神薬物治療とエンハンスメント」 『エンハンスメント・社会・人間性』 東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」編 pp.119-138 2009
- 杉本俊介 2011: 「条件的誤謬からの内在的理由説批判」 『実践哲学研究』 第34号 pp.51-70
- 立花幸司 2009: 「モラル・エンハンスメントはなぜ不穏に響くのか」 『エンハンスメント・社会・人間性』 東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」編 pp.83-102 2009
- 松田純 2007: 「エンハンスメント（増強的介入）と〈人間の弱さ〉の価値」 上田昌文・渡部麻衣子（編）『エンハンスメント論争 身体・精神の増強と先端科学技術』 社会評論社 pp.183-199 2008
- 立花幸司 2009: 「モラル・エンハンスメントはなぜ不穏に響くのか」 『エンハンスメント・社会・人間性』 東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」編 pp.83-102 2009
- なお本稿は平成二十三年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。